

011-49

信頼関係の構築を目指した家族参加型看護の一事例

栗山赤十字病院 看護部

○河合 真希

【はじめに】今回、胃癌末期の患者を担当した。その家族は医療者に不信感を抱き拒否的な態度にあったが家族参加型看護を通して信頼関係が構築できたと実感した。そこで、自分が行った関わりから信頼関係の構築の要因を検討し明らかにしたのでここに報告する。

【結果・考察】最初の面談時、先入観をもたずに誠実に真摯に関わるよう心がけ、共に患者の残された人生を考えたことで、家族は看護師の患者に向き合う姿勢を理解され、心を開ききっかけになったと考える。妻は看護師を避けているようであったが、厳しい口調や目を合わせない態度などは不安や苦悩の表れと理解し家族の真の姿を認識することができた。また、患者に対し何をすべきかわからなく苦悩していた妻に対し、できる援助を提案することで意欲や自信へとつながり、不安が少しずつ軽減されたと考える。その結果、看護師を「自分を援助してくれる人」と信頼し始め、毎日の看護ケアや関わりが信頼関係を深めることになったと考える。逝去の際には感謝や充実感・達成感を表す言葉が聞かれ笑顔で手を振り帰られた。これら一連の看護から、トラベルビーの看護師という立場や役割を越え人間と人間関係を築く4つの段階を自然に参加型看護の実践の中で取り入れることができたことで信頼関係の構築につながったと確信した。

【結論】信頼関係の構築は、家族の真の姿を見つけるために看護師は家族に近づく努力をし、一人間として理解してもらうことが大切である。また、援助する者とされる者という対極的な関係からの出発ではなく、人としての出会いを大切に、看護師の姿勢を誠実に時間をかけて伝え、終末期の不安や悲嘆を抱えている家族の心や身体に目を向け、人間関係を形成することが信頼関係の構築につながり家族ケアの始まりにもなることがわかった。

011-51

がん患者が経験する社会的役割の変化 ～自己決定に至るまでのプロセスから～

盛岡赤十字病院 医療社会事業部

○阿部 邦子

【目的】がん患者は療養中、自己決定しなければならない場面を幾度も経験する。納得した自己決定ができるように支援するソーシャルワーカーのコミュニケーションスキルに焦点をあて、事例を検証したい。

【研究方法】半構造化面接による質的記述研究である。

【事例の概要】A氏40代女性。病名は大腸がん、腹膜播種（ストーマ造設）卵巣転移。小学生の娘と二人暮らしの母子家庭。実母は同じ市内に住んでいるがあまり行き来はない。本人は化学療法の副作用による倦怠感があり、思うように母親としての役割ができていないと感じていた。化学療法中は治療に伴う経済的な相談が多かったが、徐々に自分に何かあったときの不安が大きな問題となっていた。キーパーソンの実母とは疎遠だったため「娘を育てる自信がない」と言われ、頼れないと思っている。

【倫理的配慮】個人を特定できないよう記述し、病院の倫理委員会の承認を得ている。

【考察】母親としての役割が病気になってしまったことで変更を余儀なくされ、役割喪失の悲嘆、その後、役割の変更を受け入れるまでの自己決定の支援が最も困難である。気持ちが揺れて自己決定までかなりの時間を要したが、傍に寄り添い、クライアント自身が一歩次の段階に進もうとする時、クライアントが必要とする適切な情報提供ができ、実現可能な選択ができる支援をおこなえた。

【結論】ソーシャルワーカーはコミュニケーションスキルを用い、信頼関係が築けていたからこそ以下のことができたと言える。1) クライアントの力（エンパワーメント）を信じ、持っている力を引き出す。2) 患者のニーズに対する予測的な支援（病状の変化から先を見越したタイムリーな情報提供）ができる。3) チーム医療の中で福祉面でのリーダーシップが発揮される。

011-50

終末期における家族参加型看護計画の効果

栗山赤十字病院 看護部

○稲垣 友美、小谷 幸奈、河合 真希、只野 渚、
山川 智子、小林 弘子

【はじめに】終末期看護においては、家族を第二の患者として位置づける事の重要性が多く述べられている。しかし当病棟は家族の心情に寄り添う事が十分でなかった。そこで今回参加型看護計画を取り入れ、必然的に家族と関わる機会を作る事でニーズを引き出し望むケアへと繋げられる事を期待し、本研究に取り組んだ。

【研究方法】家族に向けて看取りまでの経過を理解しやすく記載した『大切な時間』と題したパンフレットを作成した。8組の家族にパンフレットを用いて週に1回程度面談を実施し、家族と看護計画を立案、計画実施後家族の表情や言動から気持ちの変化を捉え分析した。

【結果・考察】初期計画立案時の面談で不安・不満・怒り・悲しみ・後悔と共に大切な人に全力を尽くしたい気持ちを表出された。家族が看護計画に参加する事で、死は逃れられない現実として受け止め、最良で実現可能なケアを懸命に考えた事が悲嘆のプロセスに良い影響を与えた。また看護師は最期の時間を家族と一緒に乗り越えていくという姿勢で面談と看護計画を共に実施した結果、信頼と安心感を与え合う関係性を見出し、その事が自信となり今後の看護観の構築につながったと考えられる。しかし家族が全く後悔を持たず最期を迎えさせる事は不可能であることもわかった。看護師がどれだけ親身に関わっても解決できない千差万別の思いがある事を理解し、常に謙虚な姿勢で真摯に家族に関わる事の重要性を再認識した。

【結論】1. 終末期患者の家族に参加型看護計画を取り入れる事は悲嘆のプロセスに良い影響を与える。2. 看護師は家族との深い関わりからやりがいや自覚、自信が芽生え今後の看護観の構築に繋がる。3. 後悔のない最期はないが『一緒に乗り越えていく』という姿勢で家族に関わる事が重要である。

011-52

がん患者交流会における臨床心理士の可能性

伊勢赤十字病院 医療技術部臨床心理チーム

○伊藤 翔、三堀 紗代、水谷 恵里、中井 茉莉、
奥野 真希子、料崎 智秀

【問題と目的】がんに罹患することは、その時期、治療の経過を問わず精神・身体的負担が大きい。当院では2009年よりがん患者交流会が開催されている。そこでは、医療情報の提供や適切な社会資源の紹介を行っており、2014年より臨床心理士も携わっている。臨床心理士の専門性は、個別のカウンセリングや傾聴だけではなく、リラクゼーション、心理教育や集団精神療法等多岐にわたる。臨床心理士が担当した2回の様子と参加者の感想を報告し、今後の活動を検討する。

【方法】1回目は、臨床心理士の説明、がんに伴う心身の反応の心理教育を行い、その後ディスカッションの場とした。2回目は心理療法の1つである臨床動作法を使用したリラクゼーションを行った。

【考察】心理教育では、ストレス反応や、精神科医や臨床心理士など専門家による支援の存在を知ること、新たな社会資源を得た。また、がんという共通の疾患をもつ集団で所属感を感じたことで、孤立感を低下させ、集団としてのまとまりと信頼感を体験した。その上で、参加者同士が互いに援助しあう、臨床動作法というリラクゼーションを用いたことは、より集団の凝集性を高め、言語表出を促す点で効果的であった。加えて、がんに関連する不安や悩み等の情緒を表現することで、他者に受容され、支持される体験となった。同時に、他者の発言も聞く事で、新たな対処行動の獲得や、自己のがんとの関わりを見直すきっかけとなった。Yalom※は集団精神療法では様々な心理的治療効果が生じる事を指摘した。今回のがん患者会においても、情報提供のみならず、心理的なケアも提供することができた。今後も同様の機会を提供していき、病院、ひいては地域での活動へと拡大していきたい。

※ I.D.Yalom(著) 川室 優(監訳) グループサイコロサビー 金剛出版 1997